

[研究紹介]

保育所におけるニューカマー親子への 子育て支援の現状と課題

川島雅子¹・久保恭子²・宍戸路佳³

1 神奈川工科大学看護学部

2 東京医療保健大学

3 西武文理大学

Current state and problems of child-rearing support for Newcomer parents and children in nursery schools

Masako KAWASHIMA¹, Kyouko KUBO², Mika SHISHIDO³

Abstract

[Purpose] This study explored how the childcarers in Japanese nursery schools support parents and children who are from abroad and have long lived in Japan (hereinafter referred to as Newcomers) and discussed the current problems.

[Results and Considerations] Interviews with eight childcarers about the support for Newcomers produced the following six categories: “to care for Newcomers when they enter nursery school,” “to cooperate with Newcomer parents for their children’s comfortable life,” “to support Newcomer children’s relationships with others,” “to cope with Newcomer children’s health and developmental problems,” “to consider their home background,” and “to guide them to enter primary school.” Such support is the same as that for the Japanese parents and children, but the childcarers have actually encountered various problems due to the barriers of language and culture. A stronger relationship with Newcomer parents is required, and some systematic backup framework and cooperation with other organizations are also needed.

Keywords : nursery school, newcomer, child-rearing, support

1. はじめに

近年、我が国においてニューカマーと呼ばれる、長期滞在の外国人が急増している。ニューカマーの多くは、1980年代では日本語や専門知識・技術の習得などを目的とした就学生、留学生であったが、1990年代のバブル崩壊後には、中小企業の求めに応じる安価な労働力、技能実習制度の創設等により就労目的での来日が増加し、2000年代に入ってもその傾向は続き、家族で長期滞在する在留外国人も増加している¹⁾。神奈川県においても、平成27年末現在の在留外国人数は180,069人であり全国の構成比の9.4%を占め、47都道府県別では、東京都、大阪府、愛知県について4番目に在留外国数が多くなっている²⁾。

また、就労目的で来日するニューカマーの多くは、生殖年齢の青年層であることから、日本で妊娠、出産、育児を

する人の増加³⁾に繋がっている。先行研究では、ニューカマーの子育てに関して、言語や文化・生活習慣の違いによる育児ストレスがあること^{4) 5) 6)}、子どもの健康など育児上の不安や文化的背景によるジレンマがあること^{7) 8)}が明確化され、子育てニーズとしてソーシャルサポートや社会資源利用の必要性^{9) 10)}が検討され、子育て支援の充実は不可欠である。特に、言語や文化・生活習慣の違いによる育児ストレスやジレンマを抱えながら行う乳幼児育児において、子育て支援は必要不可欠と考えられる。

児童福祉施設である保育所は、保護者が働いているなどの何らかの理由によって保育に欠ける子どもを預り養育するという子育てと仕事の両立支援に加え地域の子育て支援の役割を担っている。また、平成24年に成立した子ども・子育て関連3法を踏まえ推進されている、子ども・子育て支援新制度において、保育所は施設型給付の中心的

役割を担う施設に位置づけられている。大場¹¹⁾は、ニューカマーの親が、保育園・幼稚園で困っていることについての分析から、子どもと家族の一番身近なところで接触する専門職として、保護者の立場に立った相互関係や行為レベルの丁寧な検討が必要であると述べている。乳幼児の子育て支援の中心的役割を担う保育所の果たす役割は大きく、ますます重要度が増すと考えられる。しかし、保育所においてどのような子育て支援が実施されているか現状を実証的に明らかにした研究¹²⁾の数はまだ少ない。

そこで、子育て支援の中心的役割を担う保育所を利用しているニューカマー親子への現場での育児支援の現状を把握するため、本研究に取り組むこととした。研究者らは子どもの健康を主眼にした子育て支援を実施しており、本調査の結果を今後の子育て支援に役立てたいと考え、本大学が所在し、在留外国人数が多い神奈川県内のA市とその周辺地域の保育所の保育者を対象に調査を実施した。

2. 研究目的

本研究の目的は、子育て支援の中心的役割を担う保育所におけるニューカマー親子への保育者による子育て支援の現状を探り、支援の課題の検討をすることである。

3. 研究意義

保育所におけるニューカマー親子への子育て支援の現状を明らかにし課題の検討をすることは、保育の質の向上に寄与するとともに、研究者らの取り組んでいる子どもの健康を主眼にした子育て支援活動の一助となり意義あることと考える。

4. 用語の操作的定義

4. 1. ニュウカマー

本研究では、主に1980年代以降に日本へ渡り長期滞在する在留外国人であり、現在の国籍に関係なく外国にルーツを持ち、日本で生活する人と定義して用いる。

5. 研究方法

5. 1. 調査対象者

工業団地を有し、ニューカマーの多いと予測される神奈川県のA市とその周辺地域の保育所（保育園・子ども園）の施設長宛に面接調査の目的、方法等を説明した文書を配布し調査協力を依頼した。調査協力の得られた6施設において、施設長より研究対象者の紹介をうけ、本研究の主旨を理解の上、調査協力の同意の得られ保育者8名を対象とした。

5. 2. 調査期間

2015年10月～2015年12月

5. 3. 調査方法

半構造化面接調査。ニューカマーの子育てに関しては、言語や文化的背景、生活習慣の違いによる育児ストレスやジレンマ、子どもの健康など育児上の不安があるといわれていることから、ニューカマーの子の入園から卒園までを想定し、インタビューガイドを作成した。面接では、インタビューガイドに沿って、ニューカマー親子の子育て支援を続ける中で、入園当初に配慮したこと、園生活を送る中で子どもや親との関わりについて、子どもの健康に関すること、子どもの育ちを支えていく上でこれまでの経験から思うことについて語ってもらった。面接時間は対象者1人当たり29分～54分であった。面接はすべて筆者らが行ない、面接内容は許可を得て録音した。

5. 4. 分析方法

分析は、質的データ分析法を参考に質的帰納的に行なった。質的データ分析法は、少数事例でも、事例-コード・マトリックスを活用することで質的研究が陥りがちな、事例の特殊性にとらわれて一般的なパターンを見失ってしまうという傾向や少数事例に基づく過度の一般化を避けるうえでも有効な手立てとなる¹³⁾とされており、本調査の分析に適していると判断し用いた。具体的には、録音した面接調査内容を調査対象者ごとに逐語録におこし文書テキストデータを作成した。次に、文書テキストデータを熟読し、本研究の分析テーマである保育所におけるニューカマー親子への子育て支援についての文脈を捉え、文書テキストデータをセグメント化した。そして、文書セグメントの内容に小見出しをつける作業であるオープンコーディングを行った。オープンコーディングでは、「ここでは何が起きているのか」「その出来事は、どのような理由や原因によって起きているのか」「登場人物はどのようなことをしているのか」「この人はどういうことを言っているのか」「発言や行為の背景には、どのような意図があるだろうか」という問いを持ちながら文書セグメント、時に文書テキストデータに立ち戻りながら意味内容を捉えて帰納的にコード化を行った¹⁴⁾。次に、オープンコードの類似性と相違性を捉えてカテゴリー化してサブカテゴリーとした。さらに、文書セグメント、オープンコードに立ち返りながら、サブカテゴリー同士の関係を探りあてて集約し、抽象度の高い概念に置き換える焦点コーディング¹⁵⁾の要領でカテゴリーを抽出した。分析過程では、質的研究の経験豊富な研究者から助言を得て、信頼性、妥当性高めるようにした。

5. 5. 倫理的配慮

研究の目的、方法等を説明した協力依頼文書を配布し、施設長より研究協力の承諾の得られた施設で調査を実施した。調査対象者には、研究の目的、方法、研究協力の有無にかかわらず不利益はないこと、研究データの使途や公表、調査データの保管管理・破棄方法などプライバシーの保護は厳重に行い個人が特定できないように配慮するこ

と、語りの中の園児および保護者についても匿名化を行いプライバシーに配慮することを文書と口頭で説明し文書で同意を得た。なお、本研究は、神奈川工科大学ヒトを対象とした研究にかかわる倫理審査委員会の承認（受付番号2015-004）を得て実施した。

6. 結果

6. 1. 対象者の背景

対象者は保育者8名で、性別は全員女性、年齢は38歳～63歳で平均50歳であった。保育所の勤務経験年数は9年～29年で平均18年、全員が保育士資格を持ち、そのうち1名は看護師資格を、5名は幼稚園教諭の資格も有していた。

対象者が保育を経験したニューカマー親の母国は、ペルー、ブラジル、ベトナム、中国、韓国、フィリピン、ラオス、ナイジェリア、カンボジア、オーストラリアなどで、保育者8名全員がペルーやベトナムを母国とする親の子どもの保育を経験していた。

6. 2. 保育所におけるニューカマー親子への子育て支援の現状について

面接調査内容から作成した文書テキストデータについて、分析テーマである保育所におけるニューカマー親子への子育て支援の文脈を捉え、セグメント化を行い261の文書セグメントデータが得られた。文書セグメントデータのオープンコーディングを行い39のオープンコード、オープンコードの類似性と相違性を捉えてカテゴリー化し15のサブカテゴリーが得られた。さらにサブカテゴリー同士の関係を探りあてて集約し6カテゴリーが抽出された（表1）。

カテゴリーの関連から保育所におけるニューカマー親子への子育て支援について説明する。なお、カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは[]、オープンコードは〈 〉、文書セグメントデータは「 」で記述する。

保育者によるニューカマー親子への子育て支援では、親の日本語力を確認しつつ保育方針など園生活を説明するという【入園時の配慮と対応】を経て、子どもの園生活が始まるようにしていた。入園後は、親の日本語力や文化の違いに配慮しつつ園生活の情報を共有する【円滑な園生活のための親との連携】を図りながら、子どもの言葉の発達や友達関係を支援するという【子どもの対人関係を育む】、【子どもの健康と発達問題への支援】、子どもへの影響が大きい【家庭環境への配慮と支援】により、日々の園生活における子どもの育ちを支援していた。そして、卒園後のことを視野にいれ、子どもの先行きを考え【子どもの就学に向けた支援】もされていた。

次に各カテゴリーについて説明する。

6. 3. 入園時の配慮と対応

【入園時の配慮と対応】は【入園の経緯】【入園時の意

思疎通の確認】【入園時の園生活の説明】から抽出した。

ニューカマーの子どもは、〈役所からの紹介〉〈同じ出身国の仲間からの紹介〉〈親の希望〉といった【入園の経緯】により入園していた。入園時の親との面談では〈家族の誰と日本語で意思疎通を図れるか確認する〉【入園時の意思疎通の確認】をし、言葉の問題に配慮しつつ「園の方針とか、今後どういう保育をしていくか、通訳のできる方がいれば一緒に来ていただいて、誤解のないように関わっています」のように〈通訳できる人に同席してもらい園生活を説明する〉という【入園時の園生活の説明】をしていた。

6. 4. 円滑な園生活のための親との連携

【円滑な園生活のための親との連携】という支援は【円滑な園生活のための情報共有と課題】【食文化の違いによる課題と対応】から抽出した。

入園後には、「ひらがなの読める方だとひらがなで文書と絵を入れた資料をつくるなど工夫して」「お遊戯会の時も、こういうのをもってきてねと、言葉で通じない時は実物を見せて説明して」のように〈親の日本語力に応じ工夫して日課を説明する〉、「ローマ字だったら読めるというので、今日は何々しましたというのをローマ字で書いて伝えると、お母さんも、今日はミルクを飲みましたとか、ローマ字で返事をくれる」という〈文字情報を交えて親と子どもの情報を共有する〉、「お母さんとの文化の違いもあるので、まずお母さんの言うことをきちんと聞いて、でも日本では、こちらの保育園ではこういう考えでこう対応をしているからと伝える」という〈文化の違いに配慮し親に園生活への理解を促す〉対応が語られた。

その一方で、「お友達と言っていることが食い違ってしまったと、お母さんにも説明はしてますけど、どうしても言葉があまり伝わらないと、お友達にこうされたああされた、いじめられてるってお母さんが受け取っちゃう」のような〈子ども同士の出来事に親の理解を得るのが難しい〉、「良く分からなくても、ハイ分かりましたと言うと済んでしまうというので、でも分かってないので、実際には子どもが困っていたりする」「言葉で伝えても、物を見せて伝えても、すぐ分かったと言うんですけど、伝わってないんですね」のように〈親が受け流し日々の連絡内容が理解されにくい〉、そして、「割と時間にルーズというか、外国の方はおおらかというか大雑把という感じで、私たちはちょっとイライラしちゃうこともあるんです」のような〈親が保育園の規則を守れず対応に困る〉という【円滑な園生活のための情報共有と課題】があった。

特に文化の違いでは、食に関して、「離乳食も外国人の方ですとわりと気を使うことがなくて、急にごちゃ混ぜご飯を食べさせたり、いつまでも粉ミルクだけを飲ませ続けたりして」「咀嚼や食べ方を教えて離乳食のやり直しというか、食事の食べ方とかは指導することがありま

す」のような〈食文化の違いによる離乳の課題に対応する〉、「お弁当を作る習慣が無いのでどう作ったらいいかわからないというので、お弁当の写真を見せて説明するようにしています」という〈食文化の違いによる弁当の課題に対応する〉、「母国の食事に慣れていたので、なかなかなじめなくて」「お友達が食べているのを、ほら見てごらん、みんな食べているね、少しだけ食べてみようか

と勧めてみると、食べられるようになる」のように〈食事内容の違いによる課題に対応する〉、「宗教的なものでは肉はダメと言う場合とエキスもダメと言う場合がありますけど、その場合はアレルギーの除去食と同じに対応するんです」と〈宗教上の制限食の相談に応じる〉という〔食文化の違いによる課題と対応〕がされていた。

表 1. 保育所におけるニューカマー親子への子育て支援

カテゴリー	サブカテゴリー	オープンコード
入園時の配慮と対応	入園の経緯	役所からの紹介 同じ出身国の仲間からの紹介 親の希望
		入園時の意思疎通の確認
		入園時の園生活の説明
円滑な園生活のための親との連携	円滑な園生活のための情報共有と課題	家族の誰と日本語で意思疎通を図れるか確認する
		通訳できる人に同席してもらい園生活を説明する
		親の日本語力に応じ工夫して日課を説明する 文字情報を交えて親と子どもの情報を共有する 文化の違いに配慮し親に園生活への理解を促す 子ども同士の出来事に親の理解を得るのが難しい 親が受け流し日々の連絡内容が理解されにくい 親が保育園の規則を守れず対応に困る
子どもの対人関係を育む	子どもの日本語習得を支援 子どもの友達関係を支援	食文化の違いによる離乳の課題に対応する 食文化の違いによる弁当の課題に対応する 食事内容の違いによる課題に対応する 宗教上の制限食の相談に応じる
		子どもの日本語の習得を助ける
		子どもが日本語を分からず手が出てしまう 子どもの言葉を引き出し気持ちの理解が難しい 子どもの思いを代弁し友達関係を支援する 子ども同士の関係を注意して見守る 子ども達に多様性を伝える
子どもの健康と発達問題への支援	子どもの健康管理を支援 子どもの急病時の対応 子どもの発達問題への対応	子どもの健康について親に確認する 子どもの予防接種実施を親に確認し促す 子どもの虫歯から養育状況を気に掛ける
		子どもの体調変化を伝え受診を促す 急病など緊急時の親への連絡対応が難しい 子どもの体調不良時に受診してもらうのが難しい
		複数言語習得途上の混乱か発達障害の問題か見極めが難しい 子どもの発達の問題に配慮した対応の難しさ 子どもの発達の問題について親との意思疎通が難しい
家庭環境への配慮と支援	子どもの家庭環境への配慮 育児の悩みへの相談支援 親の不安への配慮	親の仕事や経済状況を見守る 家族関係・生活状況を見守る 親同士の交流を見守る
		親からの育児の相談にのる
		外国籍ゆえの親の不安を理解し関わる
子どもの就学に向けた支援	就学に向けた子どもと親への支援 就学に向けた小学校との連携	就学に向け子どもに日本語の読み書きを教える 就学に伴う子どもの不安の軽減 子どもの就学に向けた親の不安を理解し励ます
		子どもの就学に向けた小学校への申し送り

6. 5. 子どもの対人関係を育む

【子どもの対人関係を育む】という支援は、[子どもの日本語習得を支援][子どもの友達関係を支援]から抽出した。

園生活の中での子どもへの支援では、「手を洗う時も手を取って手を洗うんだよと水道の蛇口のところに手を差し出してあげたり、並ぶ時も並ぶんだよと言葉でいってから手を引いて並ばせてあげたり、そうやっているうちに子どもは言葉を覚える」「家では本を読んだりとか物語に触れるというのもできないだろうから、一緒に本を読んで物語に触れられるようにして、言葉の意味とか、正しい言葉使いができるようになるようにしました」のように〈子どもの日本語の習得を助ける〉という[子どもの日本語習得を支援]があった。

また、「言葉があまり分からないとどうしても手が出てしまう」「言葉が全然分からなくて、お友達と遊びたいけど、上手に遊ばなくて、結構手が出ちゃったり」という〈子どもが日本語を分からず手が出てしまう〉ことに注意を払いながら、「お友達とけんかしたりした時に、どうしてそうしてしまったのか心情のことを聞いてもなかなか表現できないので、対応に苦しむこともある」のように〈子どもの言葉を引き出し気持ちの理解が難しい〉と感じながらも、「こちらがよく気持ちを聞いてあげたり、こういうふうに伝えたいのと、こちらがうまく噛み砕いて理解して、お友達に伝えてあげる」という〈子どもの思いを代弁し友達関係を支援する〉ようにしていることが語られた。

さらに、「新しく入園してきた中国の子が不安そうにしていると、他の子が中国語で話しかけて、通訳の役目をしてくれたりして」「子ども同士では、言葉はまったく出なくても、皆といっしょに走りまわったり、他の子を真似て追いかけてっこをしたり」「一緒に遊んでいるうちに相手を理解していくというか、馴染む、遊びの中では言葉が無くても感じ合えるものがある」という〈子ども同士の関係を注意して見守る〉支援をしていた。

他にも、「ご家族はナイジェリアの方だったので、入ってきたときに、クラスの子が肌の色が違うと言ったことがあったんです。それで、子どもたちを皆集めて、本を見せながら、いろんな国があるんだよ。それで、その国にはいろんな人がいるんだよというのを教えるようにしました」など〈子ども達に多様性を伝える〉こともしていた。

6. 6. 子どもの健康と発達問題への支援

【子どもの健康と発達問題への支援】は[子どもの健康管理を支援][子どもの急病時の対応][子どもの発達問題への対応]から抽出した。

[子どもの健康管理を支援]は、「健康面も、予防接種だとかは勿論、アレルギーだとか、ひきつけだとか、そういうのは確認して、確認が取れないと、命をお預かりするので、そういうところを確認します」などの〈子

どもの健康について親に確認する〉、「予防接種の計画は保健師さんとかにも相談して、ママこれをもって病院に行つて、というので、お手紙を持って病院に行ってもらつて、病院の先生にお願いして、分からなかったら園に電話を貰うようにしていた」のように〈子どもの予防接種実施を親に確認し促す〉支援が語られた。また、「ネグレクトだったりとか、歯を見れば分かるというので、当時は虫歯の子が多かった」〈子どもの虫歯から養育状況を気に掛ける〉という支援が語られた。

そして、[子どもの急病時の対応]では、「具合が悪いときも手紙を持って病院に行ってもらっていて、体調が昨日から悪いですとか、昨日から繰り返してこんな様子ですという状況を、お母さんに書いておくねと話して、病院に手紙を持って受診してもらうようにしていました」のように、保育中の〈子どもの体調変化を伝え受診を促す〉支援がされていた。

その一方で、保育中に子どもが発熱など急な病気になり親に連絡する際には、「対面だとジェスチャーや絵を描いて伝えることも出来ますけど、電話だとそういうのは無理なので、伝わりにくい。緊急時にどういうふうに連絡をとるのか難しいですね」「急病の時の対応は難しいんです。電話をしても出てもらえなかったりして。保育園からの電話だとは分かったけど、先生が言うことが分からないから出なかったというので」のように〈急病など緊急時の親への連絡対応が難しい〉と感じていた。また、「具合が悪くても、なかなか病院に行つてくださらない方もいますね、経済的な理由もあるんでしょうかね」「咳が続くようだと肺炎になっちゃう場合もあるからと受診を勧めようとしても、肺炎というのが伝わらなかったり、忙しいから行けないとか、どこに受診したらいいか分からないとかという人もいます」という〈子どもの体調不良時に受診してもらうのが難しい〉という[子どもの急病時の対応]についての課題もあった。

また、支援する上での課題として、発達問題に関しての対応の困難さが語られた。発達問題に関しては、「発達障害系なのか多言語を覚えていく過程での混乱なのか、本来の子どもの多動性というものもあるので見極めていくのは難しいですね」「言葉の理解の問題なのか発達障害とかグレーゾーンなのかなどという、その辺のことは分かりにくい」のような〈複数言語習得途上の混乱か発達障害の問題か見極めが難しい〉と思いながら、「いわゆるグレーゾーンといわれているお子さんだと、それがその子の特性、個性なのか、発達障害なのか、職員の方でもどういった対応がこの子に合っているんだろうかと迷いながらの対応で、そういうお子さんが結構いるので、みんな困っています」「その子に手も目もかけて丁寧に関わったと思うんですけど、言葉もまったくといっていいほど話せなかったですし、生活の習慣も付きにくい」という〈子どもの発達の問題に配慮した対応の難しさ〉があった。

さらに、「ご家庭でどうなのか、親御さんに困り感が無

いかとか聞いたりしてますけど、そういうデリケートな問題だと通訳の人に伝えて聞いてもらったりしてますけど、きちんと通訳の人にも理解してもらえているのかとか、間に人を介すと細かなところまでの意思の疎通が難しいなと感じています」「その子の場合は言葉が出てこないの、専門の人に相談したほうがいいと思うとお話しましたが、親御さんはそんなに心配はしていないようで、そういう複雑な話は、言葉が通じないと難しいですね」など〈子どもの発達の問題について親との意思疎通が難しい〉と感じながら「子どもの発達問題への対応」をしていることが語られた。

6. 7. 家庭環境への配慮と支援

【家庭環境への配慮と支援】は、「子どもの家庭環境への配慮」[育児の悩みへの相談支援][親の不安への配慮]から抽出した。

【子どもの家庭環境への配慮】という支援は、〈親の仕事や経済状況を見守る〉〈家族関係・生活状況を見守る〉〈親同士の交流を見守る〉から抽出できた。

子どもの育ちに欠くことのできない大切な環境である親に関して、「母子家庭の方だったので、なかなかお仕事が続かないというので経済的にも困ってくる。仕事に就いてガンバル、ガンバルというんですけど、いつの間にか辞めちゃって、そういう繰り返しで」「自分の出来る仕事が無いというので、経済的に苦しくなって、お金が無いから大変、お財布の中に1万円しかないよ、これしかないよ、大変大変といていた時期もあり、どうかなと気にかけて、でも子どもは主食をちゃんと持ってきているし、で大丈夫かなと様子を見ていました」のように〈親の仕事や経済状況を見守る〉という支援が語られた。

さらに、「お父さんがいらっしゃらなくなって、お子さんも多くてかなり大変だと思うんですけど、お母さんは大丈夫、大丈夫とおっしゃっているの、今のところは大丈夫かなと思っていて、注意して見守っているんです」「母子家庭だと時間的にも余裕がないので、園でお母さんがどういうふう子どもと接しているかは、ちょっと注意してみている」と〈家族関係・生活状況を見守る〉支援があった。

他にも、「懇談会に来るけど言葉が分からないと、隣にいる日本人のお母さんが内容を教えてくれたりして、親御さん同士も交流できてきています」「外国人の方は、孤立とまではいかないですけど、ふつうのお母さんたちが話している中には入っていかれないですね。お国の仲間、同じ国からきている人達との関わりが多いですね」のように〈親同士の交流を見守る〉ようしていた。

また、「そのお母さんは、子どもの健康のことだと、夜寝ないとか、熱、高い、いくつ、書いてとか、こちらが37度とか38度と書けば分かってくれるので、そういうのも相談してくれた」「お母さん自身がちょっと情緒が落ち着かない方だったので、お迎えの時に時間を設けてお話をしたり、何か困っていることがあったらというのでお

話をしました」のように〈親からの育児の相談にのる〉という「育児の悩みへの相談支援」が語られた。

さらに、「私が外国人だから他の子にうちの子はいじめられてないとか、〇くんが何々が出来ないんじゃないとか、凄く心配されてるところがある」「外国で習慣も違って言葉も分からない中で子どもを育てていて、お母さんも不安な気持ちを出されるのでお話をすることも多かったです」のような〈外国籍ゆえの親の不安を理解し関わる〉という「親の不安への配慮」が語られた。

6. 8. 子どもの就学に向けた支援

【子どもの就学に向けた支援】は「就学に向けた子どもと親への支援」[就学に向けた小学校との連携]から抽出した。

日々の保育の中でも子どもの日本語習得を助け、さらに「小学校に入るというのでは、5歳で入園したので、会話は成り立つんですけど言葉の面で心配して、国語が始まるじゃないですか、なので、言葉の意味とか、きちんと言葉を正しく使ったり理解できるのか気をつけて、日常で話しながら一つ一つ確認するようにしました」「5歳児クラスになると自分の名前を書けて読めるようになるまで頑張ろうねというので、練習はするんです。外国籍のお子さん、カタカナになっちゃうんですけど、自分の名前は読めて書けるようにはなる」のように〈就学に向け子どもに日本語の読み書きを教える〉、「5歳児には学校はこういうところだよと話していたので、あまり不安は無く行けたと思います」「行く学校が皆違うので、子どもも不安もあると思うんですけど、一人でも学校でやっていける力をつけてやろうというので、やってます。そこは意識して関わっていますね」〈就学に伴う子どもの不安の軽減〉をするという子どもへの支援が語られた。

親に対しても、「先生、漢字だけは読めないし書けないよというので、この間も相談を受けたんです。小学校に行ったら、お手紙とかプリントとかもいっぱい来るから読めないと困るんじゃないかと不安に思っておられる。〇くんはA小学校にいくので、そこは国際教室もあるので、分からないことはその先生も援助してくれるから、お母さん安心して大丈夫だと思うよと話したら、良かった良かったと、少しでも安心材料があることで、お母さんも納得をされてました」のように〈子どもの就学に向けた親の不安を理解し励ます〉ようにしている「就学に向けた子どもと親への支援」がされていた。

また、「保育要録という書類を書いて子どもの健康とか発達とかを伝えたり、お父さんお母さんは日本語の理解はどのくらいできるとか、〇〇ちゃんの兄弟ですとか、細かなことは学校に申し送りをする」「お父様お母様がペルー出身で家でも母国語で過ごされているので、日本語の説明は特に丁寧にお願いしますというのを学校にも書いて伝える」のように、〈子どもの就学に向けた小学校への申し送り〉をする「就学に向けた小学校との連携」がとられていた。

7. 考察

保育所におけるニューカマー親子への子育て支援の現状について、本調査で得られたカテゴリーに添って考察し、支援の課題を検討した。

7. 1. 子どもが円滑な園生活を送るための親との連携

ニューカマーの親たちが子どもを育てるうえで葛藤が生じやすい問題は、日本語の習得と日本の特徴的な生活習慣など文化的なことを習得すること、母国語と母国の文化を維持し子どもに伝達することである。保育所において親と保育職員が日本語での意思疎通が困難な状況であると、文化・生活習慣が異なることによる問題が生じやすいと考えられる。本調査の対象者が保育を経験したニューカマー親子は、ペルー、ブラジル、ベトナム、中国、韓国、フィリピン、ラオス、ナイジェリア、カンボジア、オーストラリアなど出身国が多様であり、非英語圏の国から来日した親子が多いことが伺えた。そのため、親とのコミュニケーション、意思の疎通には特に配慮し、入園時には親の日本語力の確認、家族の誰と日本語で意思の疎通が図れるのか確認していた。日本語での意思疎通が難しい場合は、通訳できる知人、場合によってはプロの通訳者を交えて、園の保育方針や園生活の規則など、日々の集団生活をしていく上での理解を得るようにしていた。日々の園生活においても、ジェスチャーや実物を見せて工夫をしながらの説明、あるいは、ローマ字やひらがなの筆談をするなど、親の日本語力に応じて、日課や行事の説明、日々の子どもの様子を情報共有し子どもが円滑な園生活を送れるように支援していた。

また、離乳や弁当、食事内容、宗教上の制限食など文化の違いから生じる課題に対しても、親の文化的背景に理解を示し、親の考えを受け止めながら、子どもが円滑な園生活が送れるように親との連携を図るようにしていた。これらの支援は、外国人の子どもの保育において養育者が困っていることとして報告されている、言葉、文字に関すること、園への持ち物、準備に関すること、生活習慣の違いから起こること¹⁶⁾という困りごとに対応する支援と同様と考えられる。しかし、親の文化の違いに配慮して園生活への理解を促すものの、子ども同士のトラブルやちょっとした行き違いがあっても理解を得ることに困難が生じること、日本語の理解が不十分のために日々の連絡を受け流すように聞いてしまい理解してもらうことが難しいこと、説明していても文化の違いが影響し園の規則を守ってもらえず対応に困ったことなど、親の育った国との文化の違い、言葉による意思疎通の難しさを感じながら支援している現状があった。すなわち、子どもが円滑な園生活を送るための親との連携では、言葉や文化の違いによる親との意思疎通の難しさが課題であり、この課題は全国調査において、「言葉がよく通じないため保護者との細かいニュアンスが理解できない」「生活文化の違いから生活や遊びの食い違いがあった」¹⁷⁾な

どニューカマーの子どもの保育で困難を感じたと報告されている経験と同様であり、十数年を経ても解決しきれない困難な課題であると考えられる。しかし、その一方で外国人の親は、子どもが大事に受け止められていることを知ることで、言葉のハンディを超えて保育者に信頼を寄せるようになり、子どもの日本語の習得が親と園を結ぶ役割を果たすこともある¹⁸⁾ことから、日々の子どもとの関わりの質こそが、親との信頼を高め意思疎通を良好にする手立てであるように思われる。

7. 2. 子どもへの対人関係を育む支援について

子どもは職員の表情や働きかけ、子ども同士の関係を通して、日本語を習得していることが語られた。特に0歳や1歳で入園した場合には国籍に関係なく日本語の習得は進み、年中や年長での入園では、職員と一緒に本を読み言葉の意味や正しい日本語が使えるように意識的に子どもの日本語習得を支援していた。しかし、子どもは言葉で気持ちを表現することが未熟な上に、自分の思いを日本語で伝えられずに手が出てしまうトラブルになってしまうこともある。職員は、子どもの言葉を引き出しながら気持ちを理解することは難しいと感じながらも、子どもの思いを代弁し友達同士の相互作用を支援し見守っていた。さらに、ニューカマーの子ども達の言葉や容姿の違いなどをきっかけに、様々な国とその国の人達のことを話し、子ども達が多様性を当たり前のこととして学んでいけるように配慮していた。保育所に入園してくる年齢が0歳や1歳では違和感なく日本語を習得し、年中、年長になってからの入園においても大きな問題なく日本語を習得している状況が伺え、子どもとの意思疎通には日本人親の子どもの場合と大きな違いはないことが伺える。よって、子どもへの対人関係を育む支援は、子どもが言葉の習得過程にあることで、意識的な関わりが必要であるものの、子どもの育ちを支える保育所本来の支援であり、ニューカマーの子どもであることは何ら問題になるものではないと示唆される。また、保育者の関わりによっては、国籍に関係なく子ども達の国際化、多文化経験を図る良い機会になると推察できる。しかし、宮崎¹⁹⁾は、保育現場においては、外国人を受容しながら多文化保育を展開する土壌は出来ているものの保育者の多くが外国人の子どもの保育に関する基礎的な知識を欠いていると問題提起し、現場経験だけでなく保育者の多文化保育に関する基礎教育の重要性を述べている。ニューカマーの子どもの保育に関する基礎教育の充実はもとより、ニューカマーの子どもの母国文化に触れることをきっかけに保育者・子ども双方にとって多文化経験を意味あるものとするには、外国の文化や言葉を学ぼうとする保育者個人の取り組みだけでなく、現場経験の知を体系化する組織的な取り組みも重要と考える。

7. 3. 子どもへの健康と発達問題への支援と課題

乳幼児期は健診や複数の予防接種の実施が予定されて

おり、保育所における集団感染を予防する上でも予防接種の実施は重要となる。本調査では健診や予防接種と齲歯予防に関しての確認と指導により、健康管理は順調に行われていることが伺えた。保育中の子どもの急病対応においては、急病時の親への連絡は電話になることが多く、言葉だけで状況を説明する難しさ、言葉が分からないからと電話に出て貰えないこともあり、連絡方法の難しさを感じていた。そして、言葉が通じないことから受診をしてもらうのが難しい場合もあるため、子どもの体調変化を身振り手振り、体温を紙に書いて伝えるなど工夫して伝え、受診のために医療者への手紙を書き、受診を促していた。子どもの健康管理と急病時の対応に関しても、日々の保育において、子どもの健康状態に気づくことが出来るのは、身近な保育者であるものの、親とのコミュニケーションには工夫が必要であり、親との意思疎通を図るうえでの難しさがかんがえられた。

近年は、保育所において発達障害、発達障害の傾向のある子どもは増加傾向にあり、そのような発達に課題のある子どもとの関わりでは、保育上の困難さと早期発見のためのシステムの必要性²⁰⁾、保育士のバーンアウトに関係する²¹⁾など、多くの課題がある。本調査においても、子どもの発達問題に配慮した対応が困難だけでなく、複数言語の習得過程の混乱が発達障害の問題が見極めが難しいこと、子どもの発達問題に関して親と意思疎通が難しい中で対応している現状が語られた。親と子どもの発達問題を共有する上で大切なこととして、保育者として日常の保育の中で保護者との信頼関係を築いておくこと、伝えるときの環境設定、担任の保育者をフォローできる組織的な体制づくりが重要と述べている²²⁾。特に、ニューカマーであることから言葉の問題があり、通訳者を介してさえデリケートな内容が的確に伝わるか不安を感じながらの共有では、親が子どもの発達問題をどのように受け止めるか、親への配慮、信頼関係があつてこそ共有が可能となる。そのため、支援する上では、親との信頼関係はもとより、担任の保育者をフォローできる職員間の信頼関係や組織的なフォロー体制の整備も必要と考える。

7. 4. 家庭環境への配慮と支援について

ニューカマーの人達は日本で就労を目的に来ていることが多く、製造業分野を中心に就労し、景気の影響を受けやすく、働くことや住まいなど様々な生活課題が生じやすい²³⁾ ²⁴⁾。子どもが保育所に通えて就労の継続が可能であっても、職場や家庭生活の経済的基盤が不安定になりやすく、保育料さえ払えないよう状況も懸念され、せっかく得られた保育の機会も放棄せざるを得ないという子どもへのしわ寄せが懸念される。調査対象の保育者達も経験上、ニューカマーの親たちが容易に経済的危機に陥りやすいこと、特に母子家庭ではその傾向が大きいと理解していた。そのため、朝夕の送迎の短時間にも親の表情や様子に注意を払い、親の仕事や経済状況、家族関

係・生活状況を見守り、時には相談支援をしていた。ニューカマーの人達は、言語の壁や制度へのアクセスの困難などにより社会サービスの対象から抜け落ちてしまうことがあり、地域でのルールに対する不十分な理解から日本人住民との間でコンフリクトが生じやすい存在でもあることから、孤立したり排除されやすい傾向にある²⁵⁾と言われている。そのため、ニューカマーの親が孤立化していないか注意を払い、保育所内での親同士の交流だけでなく、近接して生活する同国人の仲間や近隣住民との関係なども見守り、何らかの子どもへの影響があると家庭訪問をし、外国籍ゆえの親の不安を理解し関わるようにしていた。親の仕事のこと、家族関係、友人関係など、直接的な解決は難しいものの、気づかう人の存在は大きく、さらに望めるならば、ニューカマー親子が何らかの困難な状況に陥った場合に利用できる社会資源の紹介と、市役所等の行政機関との連携を深めていく事が重要と考える。

7. 5. 子どもの就学に向けた支援について

ニューカマー親子にとって、常に言葉の問題があることから、子どもの就学に向けた支援、小学校との連携がされていた。日々の保育の中で子どもの日本語習得を助けるばかりでなく、自分の名前を読めて書けるように就学に向け子どもに日本語の読み書きを教え、子どもの不安を軽減できるように意識的に関わっていた。親に対しても、学校では保育所とは異なり日々の対面した連絡事項の伝達が無いため、親自ら手紙やプリントで分からないことは問い合わせること、小学校での国際教室などの取り組みを伝えることで、子どもの就学に関連した親の不安を理解し励まし支援していた。また、保育要録による申し送りだけでなく、必要時には小学校に出向き、ニューカマー親子の抱えている問題を共有し、小学校との連携をとっていた。一般に、ニューカマーの子どもの小学校生活では言葉の問題に対しての様々な支援²⁶⁾ ²⁷⁾がされるようになってきている。本調査においても、調査対象者は、ニューカマーの子どもが保育所を経て就学することで、小学校での子どもの言葉に関する問題は経験していなかった。

7. 6. ニューカマー親子への子育て支援の現状と課題

今回の調査で明らかになった、保育所におけるニューカマー親子への子育て支援は、【入園時の配慮と対応】

【円滑な園生活のための親との連携】【子どもの対人関係を育む】【子どもの健康と発達問題への支援】【家庭環境への配慮と支援】【子どもの就学に向けた支援】の6カテゴリーであった。これらの支援は、日本人親子の子育て支援と何ら変わりはない。特にニューカマーの子どもへの支援では、乳幼児期という言語習得過程にあることから、子どもの対人関係を育む支援のように、日本人の子どもへの支援と大きな違いはなかった。しかし、オープンコードから見ると、親との意思疎通を図るための

説明の工夫や食文化の違いによる離乳や弁当への対応のような言葉や文化の違いに配慮した支援は、ニューカマー親子への特徴的な子育て支援であると考えられる。これらの言葉や文化の違いに配慮した支援は、上野ら²⁸⁾が、外国人保護者へのインタビュー調査で明らかにしている、言語習得や文化を学ぶ、コミュニケーションをとろうとする努力などの外国人保護者が日本の園で肯定的に評価し信頼をよせている保育士の関わりと同様であり、本調査におけるニューカマー親子への子育て支援の現状は、おおむね良好であると考えられる。しかし、言葉や文化に配慮した支援をしても、ニューカマー親への支援においては、常に言葉による意思疎通の難しさという問題が根底にあることが伺えた。特に子どもの発達の問題のようにデリケートな内容の共有においては、言葉による意思疎通の難しさは支援をする上での課題である。より良い子育て支援のためには、日々の送迎時のたとえ短時間であってもニューカマー親子を気にかけてコミュニケーションをもち、円滑な園生活のための親との連携を深め、子どもの対人関係を育み、家庭環境への配慮と支援を繰り返す中で、子どもが大事に受け止められていると親が実感でき、デリケートな問題も共有できるような親との信頼関係を深めることが大切である。そして、保育者と親との信頼関係を基盤にした保育所としての組織的なフォロー体制の整備、外国人相談員や通訳者の派遣など他機関との連携をはかり、現在行なわれている、ニューカマー親子への良好な子育て支援を継続していくことが重要と考える。

VIII. 結論

保育所におけるニューカマー親子への子育て支援の現状は、【入園時の配慮と対応】【円滑な園生活のための親との連携】【子どもの対人関係を育む】【子どもの健康と発達問題への支援】【家庭環境への配慮と支援】【子どもの就学に向けた支援】の6カテゴリーであった。これらの支援は日本人親子の子育て支援と何ら変わりはないものの、オープンコードから見ると、言葉や文化のことにより配慮した、ニューカマー親子への特徴的な支援をしていることが伺えた。また、支援の過程では、親と言葉による意思疎通が難しいことから、子どもの急病時の対応や子どもの発達問題への支援などに困難が生じており、子どものデリケートな問題も共有できる親との信頼関係を構築すること、組織的な対応をしていくフォロー体制を整備することが重要と示唆される。

<引用文献>

- 1) 法務省：出入国管理白書平成27年版「出入国管理」出入国管理をめぐる近年の状況。2016, 4. 5. 8検索。
<http://www.moj.go.jp/content/001166752.pdf>
- 2) 法務省：出入国管理統計及び在留外国人統計（旧登録外国人統計）。2016, 4. 5. 8検索。 <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001150236>
- 3) 厚生労働省：平成21年人口動態統計（確定数）の概況 父母の国籍別にみた出生数の年次推移。厚生労働省, 2010. 2016. 5. 8 検索。 <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suii09/brth8.html>
- 4) 浅海, 健一郎, 安庭香子, 野島一彦：外国人母親の育児ストレスと精神的健康, および自己開示との関連: 日本人母親との比較を通して. 九州大学心理学研究, 12, 147-157. 2011.
- 5) 楊文潔, 江守陽子：在日中国人母親の育児ストレスに関する研究. 日本プライマリ・ケア連合学会誌, 33(2), 101-109, 2010.
- 6) 李 劍, 木村留美子, 津田朗子：石川県に在住する中国人母親の子育て支援に関する検討. 金沢大学つるま保健学会誌, (39)2, 171-179, 2016.
- 7) 杉浦絹子：育児中の在日ブラジル人女性の日本の母子保健医療に対する認識とその背景：日本の母子保健医療の課題に関する考察: 第3報. 母性衛生, 50(2), 267-274, 2009.
- 8) 鶴岡章子：在日外国人母の妊娠, 出産および育児に伴うジレンマの特徴. 千葉看護学会会誌, 14(1), 115-123, 2008.
- 9) 武田真由美：A 県における在日外国人の子育てニーズに関する探索的研究— 在日外国人保護者、行政担当者、支援者へのインタビュー調査より —. 関西学院大学社会学部紀要, 103号, 115-127, 2007.
- 10) 川崎千恵：在日外国人女性(Immigrant women)の出産・育児経験と支援ニーズに関する文献レビュー. 日本地域看護学会誌, 16(3), 90-97, 2014.
- 11) 大場幸夫, 中田カヨ子, 民秋言, 久富陽子：外国人の子どもの保育—親たちの要望と保育者の対応の実態— 萌文書林, 228-233, 1998.
- 12) 田崎知恵子, 久保恭子, 星野抄織：都内保育所における在日外国人母子への育児支援の現状と課題. 共立女子短期大学看護学科紀要, 2, 19-30, 2007.
- 13) 佐藤郁哉：質的データ分析法 原理・方法・実践. 第II部質的データ分析の基本原則. 新曜社, 3-73, 2008.
- 14) 佐藤郁哉：前掲書. 97-99.
- 15) 佐藤郁哉：前掲書. 108-109.
- 16) 中田カヨ子：「外国人の子どもの保育」の課題と展望. 大場幸夫, 中田カヨ子, 民秋言, 久富陽子, 『外国人の子どもの保育—親たちの要望と保育者の対応の実態—』 228-253, 1998.
- 17) 社会福祉法人日本保育協会：保育の国際化に関する調査研究報告書—平成20年度—, 2010. 2016. 5. 8 検索。 http://www.nippo.or.jp/research/pdfs/2008_02/2008_02.pdf
- 18) 大場幸夫：相互理解を深めるために—インタビューから学ぶこと—. 大場幸夫, 中田カヨ子, 民秋言, 久富陽子. 『外国人の子どもの保育—親たちの要望と保育者の

対応の実態-』, 93-97, 1998.

- 19) 宮崎元裕：日本における多文化保育の意義と課題－保育者の態度と知識に注目して－. 京都女子大学発達教育学部紀要, 007, 129-137, 2011.
- 20) 郷間英世, 圓尾奈津美, 宮地知美, 池田友美, 郷間安美子：幼稚園・保育園における「気になる子」に対する保育上の困難さについての調査研究.. 京都教育大学紀要, 113, 81-89, 2008.
- 21) 木曾陽子：発達障害の傾向がある子どもと保育士のバーンアウトの関係：質問紙調査より(第1部 自由論文). 保育学研究, 51(2), 199-210, 2013..
- 22) 高橋千枝：幼稚園・保育所における発達障害への気づきと連携. 母子保健情報, 63, 30-33, 2011.
- 23) 加藤彰彦：国際化する地域社会における在日外国人の人権. 社会福祉研究, 70, 127-133, 1997.
- 24) マルティネス真喜子, 畑下博世, 河田志帆, 金城八津子, 植村直子：労働目的で来日した在日ペルー人女性の生活と育児(地域看護活動報告). 日本地域看護学会誌 15(2), 97-106, 2012.
- 25) 門美由紀：ニューカマーの定住化と福祉施策 社会的パルネラビリティの視点から. 東洋大学大学院紀要, 9-119, 2010.
- 26) 樋口和彦：読み障害が疑われるニューカマー児童への包括的援助 臨機応変に組織されたチームでの小学校学級担任・国際教室担当者へのコンサルテーション. 特殊教育学研究, 49 (1), 73-83, 2011.
- 27) 池上摩希子：【ことばとコミュニケーションの発達】子どものことばの遅れに対する支援を考える 第二言語としての日本語の発達と支援 ニューカマーの子どもたちの「ことばの学び」を支援する. 発達, (36) 141, 70-74, 2015.
- 28) 上野葉子, 石川由香里, 井石令子, 田淵久美子, 西原真弓, 政次カレン, 宮崎聖乃：長崎市における多文化保育の現状と展望(第2部自由論文). 保育学研究, 46(2), 277-288, 2008.